

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月17日現在

機関番号：32606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770246

研究課題名（和文）満鉄農事試験場からアジアへの知識の拡散 寄贈資料と接收資料から見る影響分析

研究課題名（英文）Knowledge dissemination from the agricultural experiment station of South Manchuria railways to Asia: Impact analysis based on donated and requisitioned materials

研究代表者

湯川 真樹江 (yukawa, makie)

学習院大学・付置研究所・研究員

研究者番号：20709000

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究で明らかとなったのは、主に二つある。一つ目は、満鉄農事試験場の水稻品種や関連知識は、戦後に中国国民党や共産党の中国人幹部に利用されていたものの、その扱いは在来農業の一環としての栽培を支えるものであり、かつて満洲国が目指したような日本の精神性までを注入するような教育はなされなかったことである。二つ目は、満鉄農事試験場等で勤務していた日本人は、帰国後も満洲時代の研究や農事指導内容を否定することはなく、むしろ、同じ経験を有する人々との交流を深めながら、農業近代化への貢献を主張し、戦前の活動を再評価していたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果により、戦前の満鉄農事試験場の活動は、技術面のみならず、思想面においても影響が残っていたことが明らかとなった。これまでの研究では思想面との関係は指摘されてこなかったが、満洲の歴史認識の一部は引揚者らが自らの過去を表象するなかで築かれていったことがわかる。

研究成果の概要（英文）：This study discusses two major findings. First, after the war, the Chinese Nationalist Party and the Communist Party used the rice cultivar and its relevant knowledge to support cultivation as a part of conventional agriculture. But the one feature in Manchukuo, which was to transmit the japan mind into the knowledge, was ignored. Second, those, who had worked at the agricultural experiment station of South Manchuria railways before pre-war period, did not deny their former research and agricultural instruction content even after withdrawal back to Japan. Rather, they deepened exchanges with people with the same experience, insisted on the contribution to the agriculture modernization during the Sino-Japanese friendship boom, and re-evaluated the pre-war activity. Consequently, the difference between the content of the agricultural restructuring and the past representation has been identified in post-war China and Japan.

研究分野：歴史学

キーワード：満洲国 農事試験場 技術 接收 留用 戦後日本 歴史記憶 引揚団体

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、南満洲鉄道株式会社農事試験場（満鉄農事試験場と略称）の業務 - 主に水稻試験研究 に着目して、その影響が東北アジアにおいて如何なるものであったのか、検討するものである。

満鉄農事試験場は 1913 年、南満洲鉄道株式会社によって設立された。公主嶺本場では羊の改良や大豆の研究が、熊岳城分場では水稻や果樹の研究が行われた。設立当初水稻分野においては、寒冷な気候を持つ満洲において日本種の栽培が可能かどうかの適否試験が行われていた。1910 年代、満鉄農事試験場では日本の東北地方より品種を持ち込み、優良な種子を世代ごとに選別していたが（純系育種）1920 年代になると現地で栽培される朝鮮在来種との掛け合わせ（人工交配）も行うようになった。

1932 年に満洲国が成立してからは、試験区域の拡大がなされ、北満洲地域にも支場が設置された。1935 年以降、食糧供給の役割を課せられた満鉄農事試験場(1937 年満洲国農事試験場と改称)は稲の耐寒性を強化し、栽培地域の拡大を目指して食糧の増産を図った。その結果、農事試験場では朝鮮や北海道よりも高緯度の寒冷な地域であった北満洲で栽培可能な新品種（「興亜」「弥栄」）を生み出した。

これらの品種は満洲国の崩壊以降も、その名称のまま中国国民党や中国共産党によって現地農民に推奨された。旧満鉄農事試験場の研究は、敵国の接收機関に評価されるほどの高度な知識・技術を有していたのである。現在、中国東北地方（旧満洲）では水稻の生産が盛んで、中国国内の一大生産地にまで発展している。そこで栽培されている品種の祖先をみると、満鉄農事試験場が持ち込んだ品種が多い。よって、本研究では満鉄農事試験場の知識・技術・成果に着目し、その波及結果を満鉄農事試験場の刊行資料や接收資料等から実証的に分析することを目的とする。

本研究に関連する先行研究には 3 つの流れがある

1 つ目は、満鉄農事試験場そのものに着目した研究である。それは申請者と山本晴彦氏によって行われた研究がある。申請者は満鉄農事試験場の水稻試験研究の変遷を分析し【論文 2011】、戦後中国共産党による接收と試験研究の再開について明らかにした【論文 2013】。山本氏は『満洲の農事試験研究史』（農林統計出版、2013 年）にて満洲で設立された農事試験場の沿革を概略的にまとめ、中国東北地方における現在の農業試験研究機関に「連続性」が見られると指摘した。ただし山本氏は、接收時に満鉄農事試験場がひどく破壊された経緯、日本人技術員の帰国や関内（万里の長城以南の中国）からの中国人技術員の来場の事実について全く触れておらず、「連続性」のみを強調している。申請者は山本氏の偏った見解に疑問を呈し、接收時の具体的事例を挙げながら満鉄農事試験場の試験研究には断絶面もみられることを指摘した。しかし申請者の成果を含め、満鉄農事試験場の調査状況をみても、いまだ満鉄農事試験場の研究実態【面的・時間的影響】は明らかになっていない部分が多い。

2 つ目は、帝国日本の領域内にて繰り広げられた各地の農事試験研究を概括的に調査した研究である。その代表的な研究に藤原辰史氏の『稲の大東亜共栄圏』（吉川弘文館、2012 年）が挙げられる。藤原氏は日本、満洲、朝鮮、台湾を取り上げ、戦時体制に組み込まれていく農学者がいかに品種改良に向き合い、新品種に望みを託していったのか明らかにした。藤原氏は戦前の農学者の動向に着目し、新たな分野を切り拓いたといえるが、満洲、朝鮮、台湾における試験研究は概略的な分析にとどまっている。また、藤原氏の研究を補う形で提出されたのが、李海訓氏の論文「近代東北アジアにおける寒冷地稲作と優良品種の普及 もうひとつの「緑の革命」」（『社会経済史学』、2013 年 8 月）である。李氏は藤原氏の議論をより東北アジアに特化させ、イネの品種改良が肥料の進展とともに展開していったことを明らかにした。この論文では議論の過程で満鉄農事試験場の研究に触れられてはいるが、李氏の関心は肥料の性質とその使用状況にあるために、論点は試験場の知識と伝播にはない。李氏の論文から読み取れるのは、内地から技術が広がっていった点について藤原氏と共通見解であることである。

3 つ目は、満洲の米作の展開に着目した研究である。満洲の米作は朝鮮人農民により行われたことから、朝鮮人農民の活動に着目して分析したものが多い。代表的なものは衣保中氏の『朝鮮移民と東北地区水田開発』（長春出版社、1999 年）及び金穎氏の『近代東北地区水田農業発展史研究』（中国社会科学出版社、2007 年）である。衣氏は満洲各地の朝鮮人農民による水田開拓の地域的分布を詳細に示し、その面的広がりを明らかにした。金氏は衣氏の研究を踏まえ、さらに朝鮮人農民の農法や栽培品種にまで言及を行い、水稻栽培の実態を具体的に示した。また、朴敬玉氏は「近代中国東北地域における稲作農業の展開と朝鮮人移民 1920～1930 年代を中心に」（一橋大学博士学位請求論文、2011 年）に

において、満洲における朝鮮人農民の移住経路を捉えながら水稻品種の伝播過程を分析した。衣氏、金氏、朴氏の研究で共通しているのは、米作が朝鮮人農民の移住経路に伴って展開したと指摘し、その発展は朝鮮人農民の貢献によるものだと述べている点である。

以上、先行研究の3つの流れを確認した。さらに先行研究にて疑いもなく認識されているのは、稲の品種が水稻と陸稲の2分類にて論じられてきたことである。申請者は2010年に他にも朝鮮人農民が栽培する品種に「乾稲」と呼ばれる品種群が存在していたことを指摘した。乾稲は畑に播種し、天水を待って水田へと転換していく方法にて栽培する品種群であった。申請者は乾稲に関する認識が満鉄農事試験場と朝鮮総督府農事試験場の間で異なることに着目し、両試験間には知識の隔たりが見られることを指摘した【報告2010】。こうした研究成果より、外地における農事試験場の知識・技術は内地から均質にもらい受けたというよりも、各試験場が独自の発信源になっていたと考えるほうがより実態を反映しているのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

前述のとおり、満鉄農事試験場は満洲に適した耐寒性をもつ水稻の開発に成功するなど、高度な農業技術と知識を有していた。それは満洲国に引き継がれ、更なる水稻可耕地の拡大を見せていたが、敗戦後の知識の伝播とその実態については検討されていない。これまでの研究では、東アジア全体に残された満鉄農事試験場の研究成果・知識について体系的な調査がなされていないのが現状であったが、本研究では日本、中国、台湾、朝鮮、南洋諸島、アメリカ、ロシアに所蔵されている満鉄農事試験場関係資料を調査し、満鉄農事試験場の知識の拡散という観点から整理を行う。それは日本内地からの知識の伝搬ではなく、満洲を基軸にした知識の広がりに着目した点で本研究の独創性がある。

## 3. 研究の方法

本研究は、以下三つの分野に分けて行う。一つ目は国内（内地）の農事試験場図書館における満鉄農事試験場寄贈資料の整理とその傾向分析である。この分野では国内各県の農事試験場に保管されている満鉄農事試験場資料の性質、所蔵状況、保管状況などを調査する。二つ目は国外（外地）における満鉄農事試験場寄贈資料の調査とその傾向分析である。この分野の対象地域は中国、台湾、韓国、南洋諸島、アメリカ、ロシアである。三つ目は、国外接收機関における満鉄農事試験場関連資料調査とその傾向分析である。日本の敗戦後に満鉄農事試験場の接收を行ったのは、中国共産党、国民党、ソ連であった。アメリカは国内の資料を接收しており、それらはアメリカ本土の資料館に保存されている。よって、これらの国で接收資料を調査し、他機関が満鉄農事試験場の研究を如何に評価したのか分析する（以上1～3、申請書より引用、加筆）。

## 4. 研究成果

報告者は日本や中国、台湾、韓国などの各地の農事試験場や関係機関を訪ね、史料分析を行った。それらの結果は以下に記すこととし、まずは各地の全体状況を報告したい。

国内の調査においては、主に満洲からの引揚者にインタビューを行った。それについては多岐にわたるため、適宜「満洲の記憶」研究会ホームページやニュースレター『満洲の記憶』を参照されたい（文末参照）。

中国においては、吉林省公主嶺市にある農事試験場に数回訪問し、職員と交流、書庫の調査を行った。この機関では、図書館全体が手つかずの状態であったため、史料の状態も良好であった。現在、1950年代の研究状況を明らかにするために、当該職員とともに共同研究を進めている。

台湾においては、中央研究院近代史研究所档案館での調査を行い、国民党政権による接收状況についての分析を行った。研究者間で周知のとおり、研究所では档案の整理と公開が進んでいた。その結果は業績欄の（論文8）である。

韓国においては、水原の試験場ならびに大田の資料館を訪問し、当時の史料がどのように保管されているのかを調査した。近年の韓国政府の方針により、これまで歴史的にも重要であった水原の試験場は大田に移転した。そのため関係資料は大田に移ったと思われるが、調査をしてみても、過去の史料の存在が殆ど確認できなかった。水原の試験場はほぼ廃墟となっていたため、史料保護の観点においてこうした現状は残念な限りである。

アメリカにおいては、ミシガン大学図書館(戦前に米軍の日本語翻訳機関があった)や、ワシントンのアメリカ議会図書館、公文書館などを訪れた。アメリカ議会図書館では満鉄接收の史料を閲覧し、その所蔵状況を把握することが出来た。公文書館では満洲国崩壊後の混乱状況を示す史料や、満洲、朝鮮での日本人「保護」関係の資料を閲覧した。

上記の調査を経て、各国の試験場や関係機関の史料保管状況には大きな違いあることが明らかとなった。日本では、史料の手つかずな所では保存状態も良好であったが、管理者の一任によるところも多く、その保全状況は依然不安定であった。今後は、研究会での協同作業などを通して、史料の公開作業を積極的に行う必要がある。

なお、日本各地における農事試験場の史料調査は近年、統合データベースが公開されたためそれを参照することとした。以下、申請者による主な研究成果を詳説する。

1. 湯川真樹江「満洲国における興農合作社の組織化と水稻奨励品種の普及」『中国研究月報』73巻6号、2019年6月刊行予定)

満洲国興農合作社は、1940年に満洲国の法律に基づき設立された農業協同組合で、主に現地農民への金融援助や農事指導を行っていた。報告者は、この組織の実態を明らかにすることで、農事試験場が生み出した新品種が如何に現地に広まっていったのかが明らかにできると考えた。その結果、満洲国全土において組織化は完了したものの、その実態は各地に差があることが明らかとなった。模範興農合作社では、新品種を栽培させたのみならず、日本語や「国家意識」を植え付けるための教育をも重点的に行っていた。興農合作社では農民の思想や行動規範までを変革しようとしていた。しかしながら、戦争の悪化により、日本人職員が減少し、現地農民を動かすことは困難であったために、興農合作社の業務は「完遂」することはなかった。(論文6)

2. 湯川真樹江「中国国民党政権による満洲国立農事試験場の接收と技術者の留用に関する一考察」現在、国内学術雑誌に投稿中)

国民党政権は満洲国立農事試験場を接收し、11名の日本人技術員と現地職員を留用した。新たに場長となった王金陵は、日本人技術員を評価し、他の現地職員と同等の配給物を受けていたが、彼らの帰国は国民党政権によって管理されていた。1948年に9名の日本人技術員が帰国すると、試験場では中国人中心の研究体制が敷かれるようになった。主に関内からの技術員が研究の中心を占めていたが、満洲国期からの職員もまたそれぞれの現場で責任ある立場に就いていた。3名の日本人技術員は論文の執筆に集中しており、彼らが国民党関係者より「知識の譲渡」を求められていた。しかしながらこの間も、共産党軍の襲撃により試験場は幾度も破壊され、職員らは人員の安全確認や物品の整理などの作業に追われていた。そのため、国民党政権管理下の農事試験場では、新品種が誕生するなどの成果は生まれることはなかった。(論文8)

3. 湯川真樹江「満洲興農合作社同人会の活動からみる戦前の表象と語りの特徴 恩給請願運動に着目して」(佐藤量、菅野智博、湯川真樹江『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2019年秋刊行予定)

本論文では、興農合作社や農事試験場の職員が戦後、日本で如何なる活動をしていたのかを明らかにした。農事試験場の職員の多くは、日本で農林部門や試験場に再就職するなどしており、興農合作社の職員は県の農事指導員に再就職したり、開拓地で牧畜業を営むなど農業関連の仕事をしていた。報告者が関連資料を調べていくうちに明らかとなったのは、彼らは帰国後に同窓会や相互の協力団体(引揚げ団体)を設立しており、彼らが戦後日本の農村再興を支えたのみならず、恩給請願運動を通して、戦前の歴史を回想し、表象する主体にもなっていったという点である。農事試験場の影響は、新品種などの作物にとどまらず、人々を通じた記憶活動にも表れていたことが明らかになった。(論文7)

4. 湯川真樹江「留魂碑建立をめぐる満鉄の記憶と表象 『山内丈夫編纂資料』の生み出される背景に着目して」『日本オーラル・ヒストリー研究』第13号、2017年

報告者は興農合作社のみならず、満鉄関係についても着目し、彼らの戦後における活動を追跡した。満鉄関係者は、満鉄会という大組織を設立しており、彼らは引揚の援助や在外資産の整理、元職員の鉄道機関への再就職、恩給請願運動など多岐にわたっていた。報告者は、2017年3月に解散した「満鉄会」の事務所を度々訪れ、故天野元之専務理事より話を伺うことができた。研究会の活動を通して、報告者は「満鉄留魂碑」とそ

の関係資料の存在を知り、碑の建立を通して、彼らが如何に戦前の活動を表象していったのかを明らかにした。彼等は戦後、満鉄社員であった誇りを失っていたが、恩給請願運動の「成功」や満鉄史の刊行などを通して、「偉大な満鉄像」を「再確認」し、記念碑の創立に至った。しかしながら、満鉄が創り上げたイメージは依然として日本社会とは隔たりがあった。(論文5)

これらの調査結果をまとめると、満洲国立農事試験場の研究成果である新品種は、国民党政権などの中国人幹部によって積極的に利用されていたものの、その扱いは満洲国期におけるものとは異なっていた。彼等は日本人が抱くような水稲への思い入れはなく、農民に対しても協調性を重視するような日本の水稲文化を植え付けるようなことはなかった。その関心はむしろ獣医学や人員構成の方に注がれており、その振興は精神面の教育よりも、資金の大量投与によって支えられていたことが確認できる。

また、日本に引揚げてきた技術員らは、各地で農業関連の業務に就き、戦後日本の再興に寄与していた。それは技術面にとどまらず、同窓会などの活動を通して、過去(歴史)の表象に大きく関わっていたことが明らかとなった。彼等は満洲国期の業務を再評価することで、自らの貢献を主張し、その意義を強調していたのである。彼等のそうした言説は、現在の日本社会を取り巻く歴史観に一定の影響を与えていたといえる。

よってこれまでの研究においては、戦後日本への影響は技術面への言及に限定されていたが、そうではなく、歴史の表象という思想面においてもみられていたことが指摘できる。それについての分析内容は、共同研究の成果として2019年11月に『戦後日本の満洲記憶』という書名で東方書店より出版される予定であるため、参照されたい。

## 5. 主な発表論文等 [雑誌論文等](計 12 件)うち3件は刊行予定

### 論文

- 1、湯川真樹江「中国国民党政権による満洲国立農事試験場の接收と技術者の留用に 関する一考察」現在、国内学術雑誌に投稿中)
- 2、湯川真樹江「満洲興農合作社同人会の活動からみる戦前の表象と語りの特徴 恩給請願運動に着目して」(佐藤量、菅野智博、湯川真樹江『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2019年秋刊行予定)
- 3、湯川真樹江「「満洲国」における興農合作社の組織化と水稲奨励品種の普及」『中国研究月報』73巻6号、2019年6月刊行予定)
- 4、湯川真樹江「留魂碑建立をめぐる満鉄の記憶と表象 『山内丈夫編纂資料』の生み出される背景に着目して」『日本オーラル・ヒストリー研究』第13号、2017年9月
- 5、湯川真樹江「二〇世紀前半の満洲における水稲作試験と品種の普及について」加藤聖文・田畑光永・松重充浩編『挑戦する満洲研究 地域・民族・時間』国際善隣協会、2015年12月
- 6、湯川真樹江「(公開講演記録)満洲米作を日本人、朝鮮人、漢人の関わりから考える」国際善隣協会『善隣』2015年9月
- 7、湯川真樹江「満洲奨励品種の普及、收成和分配 以日本資料所進行之考察」『暨南史学』(中国語論文)埔里、17号、暨南大学、2014年
- 8、佐藤仁史、湯川真樹江、菅野智博「關於満洲遣返日人團體的會報及其史料價值」『暨南史学』(中国語論文)埔里、17号、2014年

### 書評

1. 湯川真樹江「書評 朴敬玉『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』」『歴史評論』803号、2017年
2. 湯川真樹江「書評 李海訓『中国東北における稲作農業の展開過程』」『アジア経済』57巻3号、2016年
3. 湯川真樹江「書評 小林信介『人びとはなぜ満州へ渡ったのか 長野県の社会運動と移民』」『日本植民地研究』28号、2016年.

### 調査報告

1. 大野絢也、菅野智博、湯川真樹江、佐藤仁史、林志宏「下関大連神社所蔵文献資料概述」『国史研究通説』(中国語論文)台北、国史館、6期、2014年

## 国際学会における発表〔国際、国内の学会発表〕(計 17 件)

1. 湯川真樹江「満洲興農合作社における農事指導とその影響」『第33回 東北アジア文化学会・東アジア日本学会秋季聯合国際學術大会』韓国、釜慶大学校、2016年10月
2. 湯川真樹江「満洲国興農合作社 農事指導 農村 水稻奨励品種 普及 中心」『2016年度満洲学会 秋季国際學術會議』韓国、仁川大学校、2016年10月
3. 湯川真樹江「中華人民共和国成立初期、東北農業科学研究所水稻室におけるソ連技術者の交流と育種法の学習 メンデル・モルガン理論の批判とミチューリン理論の推進」『第31回 東北アジア文化学会・東アジア日本学会秋季連合国際學術大会』韓国、東亜大学校、2015年11月
4. 湯川真樹江「关于国民党接管満洲国農事試驗場和技术人員的利用」『日中韓農業史学会国際大会』(中国語報告)中国、南京、2015年5月
5. 湯川真樹江、菅野智博「近代日本の東北亞經驗 「満洲的記憶」研究会之活動及展望」『中央研究院近代史研究所學術座談会』(中国語報告)台湾、中央研究院、2015年3月
6. 湯川真樹江「中国国民党による満洲国立農事試驗場の接收と技術者の留用に関する一考察」『第29回 東北アジア文化学会・東アジア日本学会秋季連合国際學術大会』韓国、釜慶大学校、2014年10月
7. 湯川真樹江「日本在満洲普及水稻奨励品種的方法与經過 探討農業侵略政策の一側面」『村落發展比較研究學術研討会：東亞經驗』(中国語報告)中国、山東大学、2014年6月
8. 湯川真樹江「満洲米作再考：朝鮮人農民が持ち込んだ品種は水稻か」『第28回 東北アジア文化学会・東アジア日本学会春季連合国際學術大会』福岡、西南学院大学、2014年5月

## 国内学会、シンポジウム等における発表

1. 湯川真樹江「20世紀前半、満洲における奨励品種の普及とその影響 興農合作社の業務に着目して」2016年度三田史学会東洋史部会、於慶應義塾大学、2016年12月
2. 湯川真樹江「朝鮮人農民による栽培品種の変更 満洲国交易場価格と農事指導に着目して」2016年度 近現代東北アジア地域史研究会大会、於日本大学、2016年12月
3. 湯川真樹江「朝鮮人農民による栽培品種の変更 満洲国交易場価格と農事指導に着目して」(2016年度 近現代東北アジア地域史研究会 プレ報告) 科研「二〇世紀東アジアをめぐる人の移動と社会統合に関する総合的研究」満洲班 2016年度連続企画 農業技術から近代を考える<1>」京都大学、2016年11月
4. 湯川真樹江「満鉄留魂碑建立をめぐる紛糾と満鉄魂の顕彰について」日本オーラル・ヒストリー学会 2016年大会、セッション「満洲の記憶とオーラルヒストリー」一橋大学、2016年9月
5. 湯川真樹江「書評 朴敬玉『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』(御茶の水書房、2015年)」戦後「満洲」史研究会・「満洲の記憶」研究会秋季大会、明治大学、2016年3月
6. 湯川真樹江「植民者による現地農業の「発見」 朝鮮在来種の認識をめぐる」報告に対する学習会、科研「二〇世紀東アジアをめぐる人の移動と社会統合」満洲班 第4回ワークショップ「近代満洲」の文明～技術が人をどうかえるか～」上智大学、2015年2月
7. 湯川真樹江「植民者による現地農業の「発見」 朝鮮在来種の認識をめぐる」科研「二〇世紀東アジアをめぐる人の移動と社会統合」満洲班 第3回ワークショップ「近代満洲」の文明～技術が人をどうかえるか～」上智大学、2015年12月
8. 湯川真樹江「20世紀前半、満洲における試験研究と米作の展開」『新しい世代から見た満洲シリーズ第3集第6回』善隣協会、2015年3月
9. 湯川真樹江「満洲米作再考：20世紀初頭における乾稲の影響」日本植民地研究会、慶應義塾大学、2014年11月

## 6 研究組織

記載事項なし

## (参考)

「満洲の記憶」研究会ホームページ

<http://manshunokioku.blog.fc2.com/>

ニューズレター『満洲の記憶』創刊号～5号(オンライン公開)

<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095>